

駿建

2017 Jul. vol.45 No.2

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

*Quarterly Journal of
Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*

Special Future

建築を見に行こう

PRADA

SPECIAL FEATURE

建築を見に行こう

LET'S VISIT
ARCHITECTURE

“建築を見る”ことは、どうして大切なのでしょうか。それはきっと、どの時代、どの地域の建築からも、新しい発見や学びを得ることができるから、私たちがこれから生み出す建築に、それを活かすことができるから、ではないでしょうか。

今回の特集では30人の先生たちに、オススメの建築を紹介していただくとともに、先生たちの「建築の見方」を添えてもらいました。巻頭では、これまで数々の名作建築を見てきた重枝先生に、「建築の見方」のコツをうかがいました。

ここで改めて、「建築の見方」を自分なりに考えて、意識して、この夏、見たことのない建築を訪ねてみてください。きっとこれまで気付かなかった新しい建築の楽しさに触れることになるでしょう。

表紙写真=Damon Jah

COLUMN

建築との遭遇は、そのときだけ

TEXT=重枝 豊 教授

「建築の見方」に定法はないと思う。ましてや、それを教えるのは難しい。そこで普段やっていることを少し紹介したい。建築見学の醍醐味は、創造者がいかに考えてその空間を創ったかを「追体験」できることだと思う。まず、与えられた設計条件を把握するために、図面などの資料や写真を徹底的に調べる。

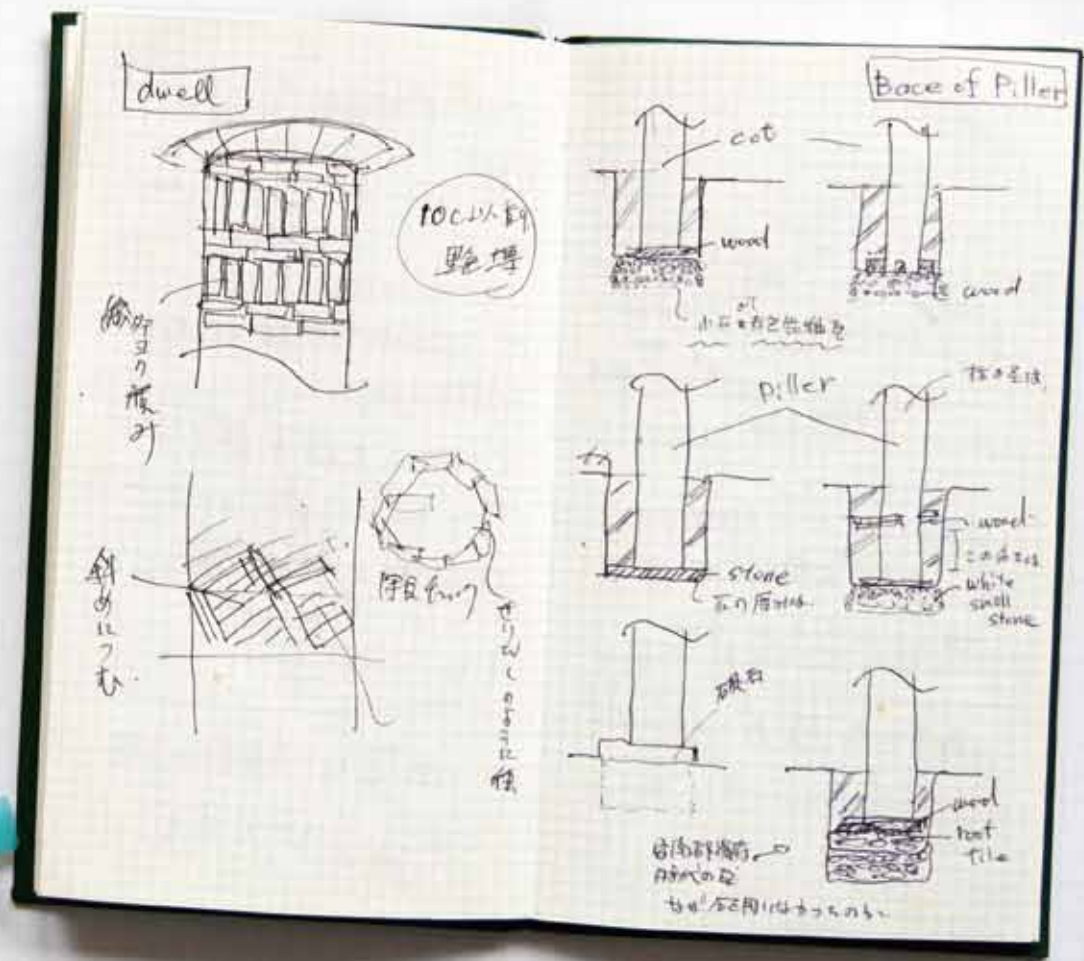
集めた資料はパワーポイントのようなプレゼンテーションツールにまとめる。たいいていの建築はインターネットで投稿写真などがダウンロードできるから、配置図を見ながら建築にたどり着き、どのような順番で見ていくべきかを想定しながらスライドを構成する。やってみるとわかるが、建築がまっすぐ撮られた写真は少ないし、目的の建築に到達するまでのアプローチの写

真もほとんどない。建築は個別の環境につくられるから、どうしても導入手法を考えるはずである。もちろんアプローチから建築を見せないようにするのも導入の手法のひとつであるが、それだけで創造者の力量が試される。そこに配慮の感じられない建築はたいていB級だが、訪れてみると10棟に1棟くらいは自分の想定を裏切るような建築もあるから注意する必要がある。

建築に到着したら、まず外観を一周しながら内部をイメージする。面白い構図やディテールがあったらその部分を撮る前に、カメラレンズをワイドにして、どこにその部分が存在するのかがわかる写真を最初に撮る。部分と全体との関係、部分と部分の関係を知ることが重要だと思う。

「ゆがみ」があることと高価なことが難点だが、レンズはパナソニックの7-14mmの広角と14-140mmのズームを組み合わせで使っている。とくに7mmは対角線画角が114°なので内部撮影には便利である。プロの写真家ではないから、美しい写真を撮ることよりも全体と部分との関係を記録する。また、長期にわたる取材や旅行では、何のために写真を撮ったのかすら忘れてしまうこともある。そのため、写真データの整理には事前に日付と建物名別のフォルダをつくっておき、その日のうちにフォルダに移動して確認する。もうひとつは、何時から何時まで見学したかなど気付いたことを簡単にメモする。時間があれば簡単なスケッチを手帳に描く。ココヨ測量野帳 SKETCH BOOK (150円くらいで購入可)





いつも持ち歩いているのは、緑の測量手帳。写真は、2005年時のベトナム・カンボジア調査で使っていたもので、ハノイのバーディン遺跡にある掘立柱の経年変化とレンガ柱のスケッチが描かれたページ。他には、2～3mが測れるコンベックス、15cmの曲尺、携帯電話で代用もできるが、マグライト（懐中電灯）と磁石、チョークなどを常時持ち歩いている。

が良い。3mm方眼で、見開きとしても縦横自由に書き込み、ポケットにも入り、表紙が厚いので屋外でもメモしやすい。

これに再訪時にはどれくらい時間が必要なのか、食事した場所、バスなどの交通機関の頻度など気が付いたことをメモする。このメモを見直すと記憶から失われた情報を思い出すこともある。ひとつの敷地に複数の建物がある場合や、大規模な建築では縮小した配置図や平面図をこの手帳に貼り付けておいて、どのように回ったかを書き込んでおく。

メモに頼らずに携帯などに録音する方法もあるが、たいてい聴き直すことはない。移動時間にそのメモを読み直して赤ペンで書き足せるのが、メモの最大の魅力である。

建築は改造も多く、突然の修理などで見学ができないこともある。もう二度とこの建物のこの状態に遭遇できないと考えて建築を見るのが鉄則である。プレゼンテーションツールを用いた資料の作成について触れたが、見学が終わったら自分の写真で改訂版を作成する。そのときにまだ訪れたことのない人を想定して、自分なりの建築解説法を考える。プレゼンテーションツールは簡単にメモが書けるから、訪問前に「角度の違う写真がほしい」とか、「本当はこんなことを考えたのでないか」などのメモを付けている。見学前に具体的なイメージを創り上げておくこと。そうしておくことによって自分だけの発見が生まれ、記憶の中に蓄積される。



私の修復の師匠である田中文男棟梁とベトナム・フエ世界遺産の修復調査（1996年2月）



フエの午門（正門）での修復状態調査。ポケットには緑の手帳が入っている。カメラは2台。調査道具は20年以上変わらない（2016年3月）

建築を見に行こう

東京編

まずは、みんなに身近な東京からスタート！

東京は世界的な建築見学都市のひとつ。

大学からも近いから、カフェに行くような気分で、

気軽に訪ねてみよう。

1 東京都渋谷区・港区/表参道駅 表参道ヒルズ・表参道エリア 2006/ 安藤忠雄 + 森ビル

世界で活躍する建築家作品が多数ある、路上建築博物館のような表参道散策と、短大の図面コピー課題「住吉の長屋」で馴染みのある安藤忠雄作品を紹介します。表参道ヒルズ（安藤忠雄+森ビル）は、関東大震災復興時、住宅近代化の課題にも対応して「同潤会」がつくった「青山アパート」（一部保存）跡地に250mの長さを有し、内部は前面道路と同勾配のスロープに接する商空間で、上部に集合住宅を設け、ケヤキ並木と一体となる景観配慮がされています。向かいには4面ガラスに内部が白のグラデーションスクリーンの「ディオール表参道」（SANAA）、ケヤキ樹状コンクリートフレームの「TOD'S表参道ビル」（伊東豊雄）が。表参道交差点を「根津美術館」（隈研吾）へ向け直進すると、網目ファサードの「ブラダプティック青山店」（ヘルツォーク&ド・ムロン）や「コレツィオーネ」（安藤忠雄）など、他にもたくさんの建築があります。ぜひ、自分で体感し、眼を養い、思考の引き出しを増やしてください。興味のある作品、建築家について調べると一層散策が楽しくなります。

横村隆子（短大非常勤講師）



2 東京都港区/品川駅 SHIBAURA HOUSE 2011/ 妹島和世

私たちは建築を見るとき、無意識のうちに建築家の意図をくみ取って理解しようとしています。それはとても大切な視点ですが、同時に大切なものを見失ってしまう危険を伴います。そこで、知性で理解する建築ではなく、1日をそこで過ごしたり、イベントの会場として利用できる建築を紹介しようと考えました。「SHIBAURA HOUSE」は港区で60年続く「広告製版社」の社屋です。2011年の社屋の建て替えを機に、これからの働き方や企業の社会的な役割について考え、エントランスホールにあたる場所をフリースペースと呼んで、地域に開放しました。建築の外側からは、ガラス張りの透明な何か、と呼ばれ、建築の内側からは、屋根のある公園と称される、都市の不思議な余白です。ぜひ、ひとりの利用者として、建築の力を感じに行ってみてください。

式地香織（非常勤講師）



3 東京都千代田区/東京駅

東京駅

1914 (竣工) / 辰野金吾、2012 (復元)

東京駅は1914（大正3）年、鉄筋レンガ造3階建てで完成しました。東京大空襲（1945（昭和20）年）で鉄骨造の屋根が焼け落ち、内装も失われ、戦後には2階建てで修復がなされていましたが、2012（平成24）年にもとの形に復元されました。東京駅前には容積率1,300%が指定され、日本の中で最も高度利用が指される地域となっていますが、駅舎は容積率300%未満しか利用されていません。そこで、新丸の内ビルをはじめ複数のビルに残余容積率を移転することが可能な特定容積率適用地区が指定され、復元工事の費用は容積率の売却によってまかなわれました。東京駅は国の重要文化財に指定されていることから見るべき点は多数ありますが、復元に際しては免震装置が導入され、屋根材の雄勝石や外壁の花崗岩など当初の姿にこだわっています。

宇於崎勝也（教授）



4 東京都江戸川区/葛西臨海公園駅

葛西臨海水族園 葛西臨海公園展望広場レストハウス

1989 (水族園) 1995 (レストハウス) / 谷口吉生

大学に入学したばかりの頃、後に師となる高宮真介先生の講義で紹介され「建築ってかっこいい!」と思った建築です。緩やかに上る道の先に空へ溶け込むほど透明なレストハウスがあり、導かれるように向かうとそこではじめて東京湾が見渡せたこと。海面と一体的な景観をつくる屋上の噴水池から海中へ潜るように水族園へ入ったこと。ワクワクしたそれらの経験は記憶に刻まれ、今もあの建築は同じように人びとを迎えているであろうと、古い友人を思うような気持ちでいました。こうした記憶の中の建築を、先日十数年ぶりに訪れました。公園の木々は茂り、以前より落ち着いた印象を受けた一方で、美しかった建物には傷みが見られ、優れた現代建築をどのように維持していくのかを考えさせられました。それでもあのとき感じたワクワクは変わらずそこにありました。良く晴れた日の見学をおすすめします!

長谷川洋平（非常勤講師）



5 東京都台東区/上野駅

JR上野駅

1932

言わずと知れた東京の北の玄関口。現存の建物は1932（昭和7）年竣工の3代目駅舎で、地盤の高さを利用した乗降口の立体的分離、貫通式と頭端式（行き止まり）をともに持つ線路形式が特徴です。コンコース、券売所、待合、駅事務所などに大規模なエキナカ店舗が加わった複合駅舎で、築後85年にわたり増築と改修を繰り返して使われています。また、地下4階地上3階にわたる22のホームや高架、上野公園との高低差をつなぐ立体自由通路を抱えています。歩き回ると、土木と建築の狭間にめくるめくシークエンスが展開する迷宮です。中でもグランドコンコースと呼ばれるアトリウムが中心的存在。リベットで編まれた鉄骨の柱梁が支える明るい膜屋根の広間には、さまざまな役割や立場の表象が一堂に介し、大量の商品、情報、そして多国籍多世代の人々が溢れています。妻面に描かれた猪熊弦一郎の「自由」という絵画が、そんな光景を見つめています。

馬場兼伸（非常勤講師）





6 東京都渋谷区/原宿駅 国立代代木競技場 1964/丹下健三

この建物の面白さは有名な「セミ・リジッド」という構造システムに凝縮されています。印象的な屋根フォルムはメインとサブを組み合わせた吊り構造によるものですが、メインケーブルの位置を決め、そこからサブのケーブルを吊ると、自然に力が加わった形が「自然」に見える曲面になりません。構造エンジニアは悩んだ末、サブの吊り材を曲面形を調整できる曲線形状の鉄骨とするシステムを思い付き、現在の「自然」な吊り曲面が実現しました。これがセミ・リジッドの説明です。そして、この話には続きがあります。その後、解析でバランスの取れたセミ・リジッド屋根曲面を求めると、不思議と手づくり粘土模型でつくったスムーズで「自然」に見える面と同様になったそうです。通常、構造とデザインは単に折り合いを付けることで成立していることが多いのですが、このシステムでは構造(合理性)とデザイン(感性)とが折り合いを必要とせず自然と一致します。そんな構造とデザインの弁証法的発展ともいべき新しいシステムの発見が、ここにはありました。だから名作と言われるのでしょう。

塚田修大 (非常勤講師)

7 埼玉県秩父市下影森 萬松山圓融寺

秩父札所二十六番に指定される「萬松山圓融寺」。この本堂から出て山沿いを歩き、300段余りの石段を登ったところに、この岩井堂があります。人気のない山中に現れる迫力ある懸崖造りのお堂は、高い技術でここにしか存在し得ない空間をつくり出しています。私はこれまでたくさんの神社を訪れてきましたが、いつもスケッチを描き、実測をして、その背景となる歴史を調べる……ということをまったくしていません。ちゃんとやっていたら今頃、と思うこともあります。神社を訪れることが“作業”になってしまうのが嫌で、せいぜい写真を撮るくらいです。神社の魅力は、なんとと言ってもそこでしか体験できない空気感を味わえることです。これはネットでいくら調べても出てきませんので、行くしかありません。帰り際にドンッ、と大きな音がして、驚いて振り返ると屋根から猿の親子がこちらを見つめていました。そんな不思議な経験も、実際にその場に行かないと味わえないものかなと思います。

北 茂紀 (非常勤講師)

8 埼玉県所沢市 / 西武遊園地駅 西武園ゆうえんち 1985 / 池原義郎

建築家の池原義郎が1980年代半ばに手がけた遊園地です。敷地は約16haもあり、緑豊かな自然の中に夢の空間が広がっています。ウェーブスウィンガーなどの遊具は地形を活かして配置されているからか、歩いていると、森の中のアちこちでパッと夢の世界が開くような場所に出会えます。一方で、中心にあった池を埋め立てておもちゃのような遊具のエリアを配置するなど、現在では、建築家の描いた遊園地の全体性は損なわれているところもあります。残念な状況もありますが、たくさんの細やかなデザインの装飾全体が群として放つ遊園地全体の雰囲気は今も生きており、ポストモダンの時代に、モダニズムにつながる虚飾の空間が生み出すものに本気で向き合った建築家の仕事に触れることができます。さまざまところで見られる徹底的に重力を感じさせないディテールも素晴らしいと思います。観覧車が軽やかすぎるので、ふと「観覧車」の言葉で画像検索をしてみました。画像と目の観覧車のあまりの違いに、設計者として一気に目が覚めた気がしました。

今村水紀（非常勤講師）

9 東京都八王子市 / 北野駅 大学セミナーハウス 1965 / 吉阪隆正

僕がお勧めするのは、八王子市に位置する「大学セミナーハウス」本館。逆ピラミッド型の楔が、大地に打ち込まれたかのような力強い造形が印象的な、1965（昭和40）年に竣工したこの建築は、日本人建築家としてル・コルビュジエのもとで学んだ3人の弟子のうちのひとり、吉阪隆正の代表作のひとつです。1999（平成11）年には、日本の近代建築20選（DOCOMOMO JAPAN）にも選定されています。大学1年生になったばかりの4月、僕ははじめてこの建築を訪れましたが、あのとき感じたコンクリートの圧倒的な質感を今でも鮮明に覚えています。広大な敷地内には、ピラミッドのような形状をした「中央セミナー室」や、地面と呼吸した有機的なルーフが特徴の「松下館」など、本館以外にも素晴らしい建築が点在しています。個々の建築が個性を放ち、緊張感を保ちながら配置された高低差の激しい大地全体に、吉阪隆正が提唱した「不連続統一」という概念が通底しているのを実感できるでしょう。ぜひ、訪れてみてください。

古澤大輔（助教）

10 東京都港区 / 虎ノ門駅 JTビル（日本たばこ産業本社） 1995 / 大成建設

JTビルはエントランスホールがガラスの箱の中に収められています。日射や外気温の影響を大きく受けるガラスの大空間は、空間の快適さと同時に環境の快適性を満足させる設備計画が求められます。本社の受付でもあり、受付待ちの来客者のたまり場にもなっている居住環境の空調をどう構築しているのでしょうか。建築計画では、見せ場としての内装デザインと日射のコントロール方法、ガラスの仕様の選定がキーポイントになります。設備技術としては、大空間全体の空調を行うのではなく、居住域に着目した空調として、写真に番号を入れたように、①床吹出空調、②窓面空調、③筒型吹出口などの装置を適切に配置することにより環境の快適性を実現しています。内装デザインや空調ダクトのルートの考え方について、建築計画と設備計画の有機的な調整が求められているのです。

谷 信幸（非常勤講師）



Special Feature



SHUNKEN 2017



JULI

vol.45 no.2

007

建築を見に行こう

日本編

青春18きっぷやAirbnbを使えば、

格安でどこにでも行ける時代。

もう少し足を延ばして、建築を訪ねてみよう。

東京にはない地域性は、どこに見られるかな？



1 長崎県南松浦群新上五島町 頭ヶ島天主堂 1919/ 鉄川与助

長崎県五島列島にある「頭ヶ島天主堂」は、明治初期に五島で生まれた棟梁大工、鉄川与助の教会建築です。1873（明治6）年によく、キリスト教の長い禁教令が解けて、隠れキリシタンと呼ばれる人々が多く住む長崎・熊本地方を中心に多くの教会が建てられました。その中で彼は、出会った神父から教会建築の思想や技術を学び、研鑽を積んで、生涯30棟以上の教会をこの地方につくりました。五島列島には今も彼のつくった教会が多く残っていますが、その中のひとつ「頭ヶ島天主堂」は唯一の石造の教会です。信者に対して鉄川は地元で採れる砂岩で教会をつくることを提案。10年の歳月と信者たちの労力で完成しました。外壁の粗い石積の迫力にまず圧倒されます。内部は一転し、やわらかな木造の折り上げ天井。可憐な白い椿の花の意匠が美しいです。教会の前には十字架の載る墓碑が海に向かって並んでいます。隠れキリシタンの歴史とともに、五島列島の美しい自然に感動する旅になると思います。

大沢悟郎（短大非常勤講師）

2 岐阜県岐阜市/岐阜駅 みんなの森 ぎふメディアコスモス 2015/ 伊東豊雄

市の中央図書館を主体とした複合文化施設です。特徴的な2階の開架閲覧室は、約90m四方の空間がゆるやかに波打つ木造の屋根で覆われ、グローブと呼ばれる天蓋がいくつも吊られています。このグローブは空間の連続性を確保しながらも柔らかい境界をつくり出しており、天窓から差し込む光を拡散し、風の流れを生み出すことで室内環境の向上にも寄与しています。また、三角形格子に編まれた木造の屋根は、幅120mm×厚さ20mmのヒノキ材を9～21枚積層することで構成されています。グローブ上部でむくすることで、グローブの性能を高めると同時に、屋根の大スパン化を可能にし、周囲の山並みと呼応した外観をつくり出しています。実際に訪れてみて「良くつくったな」というのが率直な感想ですが、木の格子で覆われ、天窓からの光に照らされた白いグローブが浮かぶ様子は壮観です。1階には屋根のモックアップが展示してあるので、忘れずに間近で見てください。

廣石秀造（短大助教）



3 静岡県掛川市/掛川駅 資生堂アートハウス

1978/計画・設計工房(谷口吉生+高宮真介)

この建築に出会ったのは、1979(昭和54)年、大学2年生のとき。ネット情報などない時代に毎月心待ちにしていた「新建築」の紙面を見たときの新鮮な驚きは、今も変わりません。ランドスケープという言葉が、まだ一般的でなかった時代に地面と建築が一体になった写真とドローイングに衝撃を受けました。現地で、高宮真介先生(元本学教授)から説明を受け、アプローチから展示室までの流れるような空間や、すべてのシーンが計算し尽くされ、什器から備品までもが統一された完成度の高さに驚かされました。幸運にも2002年にこの建築の改修に関わることになりました。憧れの建築、建築学会賞を受賞している建築に手を入れるという重責を担い、鳥肌の立つ思いでした。現在も小さな改修などに関わることもあり、現地を訪れる機会が多々あります。28年経過した今でも、その都度、新鮮さを失わない奇跡の建築です。ぜひ訪れてください。

永曾琢夫(非常勤講師)

4 新潟県十日町市/十日町駅 十日町産業文化発信館いこて

2015/手塚貴晴+手塚由比

十日町駅近くの商店街に建つ情報発信拠点。「いこて」とは、「行こうて(行こうよ)」や「いいこて(いいね)」という方言から付けられたそうです。十日町は日本有数の豪雪地帯なので、建物をかまぼこ形にして、自然と周囲に落雪するように考えられています。建物の内部は木の構造材が「現し(構造体などが見えるつくり)」で、木の温かみが感じられ、自動ドアも木製です。構造体を現しとすると、空調ダクトや電気配線の隠べい方法が問題となり、建築設備の設計が大変難しくなります。ここでは、床のフタを開けると構造体の隙間が配線スペースになっていたり、床下空間を空気の通り道にして空調ダクトを省略したり、さまざまな工夫がなされていました。一部の電気配線は、今ではかなり珍しい「がいし引き」となっていて、なんと配線が現しなんです。面白い建物の形状で、建築設備の勉強もできる、いこてに行こうて!

井口雅登(助教)

5 香川県小豆郡土庄町 豊島美術館

2010/西沢立衛

絵画や彫刻は移動できるので、海外の有名美術館のコレクションだって日本にやって来ることがありますが、場所との深い関わりを持つ美術作品の中には、その場所を訪ねなければ鑑賞することができないものがあります。内藤礼さんの「母型」という作品もそのひとつで、瀬戸内海の豊島につくられ、そのたったひとつの作品のためだけに「豊島美術館」がつくられました。どのような作品であるかは、言葉で説明しても伝わらないので詳しくは書きませんが、本当にすばらしい作品なので、だまされたと思って、ぜひ一度訪ねてみてください。美術館の設計は西沢立衛さんによるものです。これもまた言葉では説明できないので詳しくは書きませんが、本当に……以下略。つまり、場所と深く結びついた美術作品や建築の魅力は、写真や言葉では決して伝わらず、実際にその地を訪ねて体験するしか方法はありません。さあ、建築を訪ねてみましょう。

佐藤慎也(教授)

6 新潟県南魚沼市/浦佐駅 新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院

2015/山下設計

魚沼地域医療再編におけるこの地区の基幹病院で、三次救急と高度医療を担っています。この病院では、ホルムアルデヒド汚染を引き起こしやすい病理検査用切出室などにおいて、良好な作業環境と省エネルギーを両立させることが課題でした。まず、U字型の特殊な気流を用いた発散抑制気流方式により、切り出し作業で発生したホルムアルデヒドを95%以上の効率で捕集しています。作業エリアに大型のダクトや機器、大風量のファンを必要としないため、広い作業スペースを確保し、静かな作業環境を実現しています。また、アミノ酸など食品添加物からなる安全な薬液を用いて、ホルムアルデヒドを長期にわたって安定的に除去できます。処理した室内空気は循環利用できるようになり、導入外気風量は全外気方式の空調換気システムと比較して50%以上削減されました。以上の実績により、この建物はさまざまな賞を受賞しています。

池田耕一(特任教授)



Special Feature



SHUNKEN 2017

Jul.



vol.45 no.2

096



7 長野県北安曇郡/信濃松川駅 安曇野ちひろ美術館 1997/内藤廣

私たちの日頃の設計では、余裕のない敷地にいかにボリュームを詰め込むかというルーティーンに陥りがちですが、ときには自然豊かな場所へと足を延ばし、大らかな気持ちで風景や建築と向き合いたいものです。「安曇野ちひろ美術館」は、そんな自然の中で、建築がいかに振る舞い、佇むべきかを教えてくれる建築のひとつです。シンプルな切妻屋根の連なりは、背景に連なる信州の山々と呼応し、あたかも昔からそこにあったかのような風景をつくり出しています。そこに建築が建つことで風景がより引き立つことは、建築の理想的なあり方のひとつに違いありません。また、素朴でありながら温かみのある内部の素材使いや、細部にまで神経の通った設計も、訪れた人の心を満たされたものにしてくれます。一方で、ダイナミックな木造架構や中村好文さんによるヒューマンスケールの家具デザインなども見どころです。

関本竜太（非常勤講師）

8 愛媛県八幡浜市/八幡浜駅 八幡浜市立日土小学校 1956、1958/松村正恒、2008（改修）

はじめてこの小学校を訪れたときのことが忘れられません。夕暮れが近付き、小学校の放課後の、あの独特の雰囲気に包まれていました。木造で建てられた校舎は懐かしいぬくもりに満ち、一方、モダニズムの建築の透明さ、清澄さを漂わせていました。「木造モダニズム」と呼ばれはじめていた、日本独自の近代建築の空間を実感した瞬間でした。設計した松村正恒は、土浦亀城の事務所で修行し、モダニズムのデザインを身に付けました。その後、郷里の愛媛に戻り、八幡浜市役所で公共建築の設計に携わり、地域の振興に力を尽くします。モダニズムと地域・風土、この永遠の課題の見事な解答が眼前に広がっていたのです。解体の危機に瀕していましたが、関係者の多大な努力で乗り越え、ワールド・モニュメント財団のモダニズム賞、そして戦後の木造建築としては初となる国指定重要文化財となりました。ドコモモ・ジャパン（DOCOMOMO Japan）の「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」20選に選定されています。

田所辰之助（教授）



9 千葉県千葉市緑区/土気駅 ホキ美術館 2010/日建設計

保木将夫氏が所蔵する絵画やワインを展示する美術館。緩やかな円弧状平面の筒状のギャラリー空間が複数積層されています。ギャラリー空間は最も長いもので100mほど。連続的にプロポーションを変化させながら、自然光の採り入れ方など随所に工夫が施されています。構造的な最大の特徴は、最上階のギャラリー空間が浮遊しているように錯覚するキャンティレバー形式。跳ね出し長さは、スタジアムなどの大空間建築に匹敵する約30mもあり、連続梁形式の全体架構計画により実現しています。さらに高さ約3.6m×幅約6.1mの中間仕切りのある筒状のキャンティレバーのひとつの外壁面に、連続的にスリット状の窓を設けることで浮遊感を強調するなど、構造的にも挑戦的な作品です。デザインとエンジニアリングの協働なくして実現できない、まさに必見の建築。

宮里直也（教授）



10 奈良県宇陀市室生/室生口大野駅 室生寺

この「室生寺」は車じゃないと訪ねるのが難しい場所にあり、ちょっと寄ってみようという気軽さでは辿り着けません。それでもお勧めするのは、「室生寺」がある環境、それらを包む日本の四季、そして「敷地の可能性」を活かそうとする古人の意思が随所に垣間見られるからです。近くまで辿り着くと、目の前には室生川が流れており、そこに架かる橋を渡ると境内。平地は少なく、急峻な斜面と川との間の空間が人々を奥へ誘います。しかし、門を過ぎるとその後は斜面を利用した巧みな伽藍配置がなされており、石の階段が各建物をつないでいます。いわば昔の日本人が作り上げた「ランドスケープ・デザイン」が、信仰という形でそこにあります。常に雨が降っているイメージのある「室生寺」ですが、それでもぜひ梅雨の季節に行ってみてください。そして境内の一番最後「奥の院」まで行くことをお忘れなく。上り切った階段の先には凜とした空が待っています。

遠藤克彦（非常勤講師）



建築を見に行こう

海外編

海を越え、文化や言語が異なる国々にも、

さまざまな建築が建っています。

こんな建築があるの!?

建築とは、そもそも何なの?

学生時代に一度は、世界の建築を見る旅を。

Special Feature

1 スリランカ ヘリタンス・カンダラマ 1994/ジェフリー・パワ

インド洋に浮かぶスリランカの内陸部、世界遺産のシーギリア・ロックの近郊にあるホテルです。設計はスリランカ人建築家のジェフリー・パワ。1994（平成6）年完成で、構造はシンプルな鉄筋コンクリートラーメン構造。客室のバルコニーに付け足された幅1.5mのフレームに植物が繁茂し、建物とジャングルが一体化しています。早朝にはフレーム部分で遊ぶ数頭の猿を客室内から見ることができます。まさにこのフレームが周囲の環境をデザインに巻き込む仕掛けをつくり出しています。圧巻はエントランスホールからロビーに至る通路空間。ホテルは山に沿って建てられていますが、通路空間は山の中を削り貫いた岩の露出したトンネル空間となっています。通路に近付くと心地良い風に誘われて自然と足が向かい、通路を抜けると風景が突然広がるといったシークエンシャルな空間が用意されています。モダニズムの建築言語を用いつつ、風が肌に触れる心地良さまでデザインできると感じさせてくれた建築です。

鹿内 健（非常勤講師）

2 シンガポール マリーナベイ・サンズ 2010/モシェ・サフディ

シンガポールを象徴する「マリーナベイ・サンズ」は、3棟の高層タワーの屋上に船に乗ったようなインパクトの強いデザインですが、デザイン振興に力を入れているシンガポールでは、地震・台風が発生しないことから、このような奇抜なデザインの建築物がたくさんあります。写真からもわかる通り、東側（写真左側）の棟は52度傾いており、これはイタリアのピサの斜塔より10倍ほどの傾きとされ、当時は「世界で最もつくりにくい建築物」という評価を受けていたそうです。実際に下から見上げると、ビルの傾きや中層階から外側へ戻った構造が非常に印象的でした。施工方法も大変気になるところです。また、シンガポールでは、ほとんどの建物の外壁面にガラスカーテンウォールを採用しており、このホテルでも自然光を建物内に採り込むことにより、フロント周りや上部の吹き抜けがとても明るく開放的でした。興味のある方は、夏休みにシンガポール建築巡りを計画してみてもいかがでしょうか。

阪本一生（助手）



SHUNKEN 2017



Jul.

vol.45 no.2

011

© Wenjie Zhang



3 イギリス・ロンドン ロイズビル

1986/リチャード・ロジャース

世界最大の保険組織、英国ロイズ保険組合の本社ビル「ロイズ・オブ・ロンドン（現：ロイズビル）」は、当時、パリの「ボンビドー・センター」などとともに「ハイテックスタイル」と呼ばれ、建物の内外を裏返したように、本来は内部にあった構造や設備配管、エレベーターなどが外にむき出しになっています。整形のワークスペースに対して、最適な位置に設けられたエレベーターや設備系統、システム天井、OAフロアに床吹き出し、壁なみの断熱性能を持つクロズダブルスキン、日射を遮るスパークリングガラスなど、あらゆる技術がこのオフィスによって開発され、その後の建築界のみならず、建築産業にも多大なる影響を与えました。徹底的な合理性の追求とこうした技術の集積によって、まるで金属製のゴシックの大聖堂のような、圧倒的な存在感を持っている現代建築の古典にして最高峰の建築です。

羽鳥達也（非常勤講師）



4 カナダ・バンクーバー 学生自治委員会ビル

2015/DIALOG+B+Hアーキテクト

カナダは環境問題やサステナビリティへの取り組みで世界の最先端をいく国で、特にブリティッシュ・コロンビア州は、2009（平成21）年に公共建築物に木質建材の使用を最優先させることを条理化しました。また、バンクーバー市は2020年までに「世界一グリーンな都市」になることを目指し、積極的な環境問題対策を推進し、革新的な“マスティンバー”に関する最新建設技術の一大拠点として、率先して建築物の木質化に取り組んでいます。ブリティッシュ・コロンビア州立大学内につくられたこの「学生自治委員会ビル」も、構造材から仕上げ材に至るまで木材を特徴的に使用し、サステナブル建築としてLEEDプラチナを取得しています。学生が自由に集うアトリウムは集成材による柱と木トラスによる大空間。空中に突き出した木質ホールに圧倒されます。3層吹き抜ける階段室の湾曲する大断面集成材柱も見ものです。

細澤 治（非常勤講師）



5 モロッコ シャウエン

1930年代

旅に出たら集落を訪れてください。知らない集落を訪れるときには、その場所の歴史や文化、気候や風土をあらかじめ調べておく必要があります。集落には長い年月を経て育まれてきた住まいの叢智が込められており、建築的なアンテナを研ぎすませていなければデリケートな魅力を見逃してしまいます。集落は魅力的な装飾や意匠に満ちていますが、それらをただ物珍しいものとして見ることは勧めません。それらの意味や背景を慎重に理解することが重要です。建物や通り、教会や広場など、集落を構成するものの配置にも意味があります。多くの集落はデザイン的に統一されているように見えますが、良く見るとそれぞれの建築には微差があります。集落は外に対しては類似性を示し、内に対しては互いの差異性を競い合っています。こうした類似性と差異性の複合が、群としての建築や集落の魅力を生み出しているのです。

山中新太郎（准教授）



6 フランス・エヴル ラ・トゥーレット修道院

1960/ル・コルビュジエ

大学院生時代にヨーロッパを中心に2カ月、建築巡りをしていたときに訪れました。交通は不便ですが、宿泊してル・コルビュジエ建築を体験できるのでお勧めです。想像以上の急激な斜面を登っていくと立ち現れます。建物周囲の内外部を横断する回廊動線の天井高さ・光・色彩の変化によるシークエンシャルな空間体験は強烈で、今でもすごく鮮明に覚えています。構成要素がコンクリートとガラスと単純でありながら、全体像がつかみにくいほどのバラバラな空間を連続的に体験することができます。また、細いコンクリートマリオンによるリズムを持ったガラスファサードも、ディテールを含めて必見です。これは、現代音楽家でもあり、当時の設計担当であったヤニス・クセナキスによるもの。彼の考える、「建築とは凍れる音楽である」という、時間軸と建築・音楽との関係の思考も勉強してから訪れてみてください。

篠崎弘之（非常勤講師）

7 エジプト・ルクソール カルナック神殿

紀元前 1550-1069年頃

船を降りると、身体が砂漠に同化するような湯気に襲われた。そのとき、人類史とともに時を重ねた巨大な廃墟が曇気楼のごとく立ち現れた。その超越的なモノの存在は、「人間」の小ささの理解を、乾ききった僕の身体に強要した。それがはじめて訪れた「カルナック神殿」の記憶です。「カルナック神殿」は古代エジプト文明の儀式的場で、新王朝時代を中心に、1,000年以上の増築を重ねて今のカタチとなりました。機能と形式、情報と表層、地域性と構成、権力と空間、時代と時間、竣工と増改築など。建築に課されたその役割は現代と重なり、時空間を超えた「建築の本質」を示しています。中でも134本の巨大列柱室の体験は圧倒的で、ハイサイドライトの薄暗い光のみが頼りだった竣工時を想像するだけで鳥肌が立ちます。建築を訪ねて得られる違和感の積み重ねが、建築的原風景になると教えてくれた場所でもあります。

菅原大輔（非常勤講師）

8 ヴァチカン システィーナ礼拝堂

1512

上面にはミケランジェロによる天井画、そして正面には有名な『最後の審判』が描かれた礼拝堂。『最後の審判』は、そのサイズが13.7m×12mと、ひとりの人間が描いた絵画としてはとてつもなく巨大であり、画像で知った気になっていたのだが、目の前にしたその絵は、あまりにも神々しく、部屋に入った瞬間に圧倒された。それもただ巨大だというだけではない。極めて精緻に描かれており、もはや人間が描いたとは思えない。それこそ神がいるのではないかと思わせる。また、ミケランジェロは、隣接するサン・ピエトロ大聖堂のドームも手掛けており、このドームから一直線に入ってくる光は息をのむほど美しい。現在、素朴に神を信じるのはあまりにも困難だが、これらの建築物は、今なお人々に神がそこにいると信じさせるほどの強度を持っている。

浅子佳英（非常勤講師）

9 ブラジル・サンパウロ サンパウロ大学建築都市計画学部棟

1969/ヴィラノヴァ・アルティガス

2015（平成27）年にブラジルに行く機会を得ました。ブラジルの建築家と言えば、オスカー・ニーマイヤーを思い浮かべるかもしれませんが、ご紹介するのはヴィラノヴァ・アルティガスのサンパウロ大学建築都市計画学部棟（FAU USP）。エントランスというものはなく、中に入ると地下1階から3階まで巨大な吹き抜け空間が広がります。なんと地下への吹き抜けには手摺がなく、この伸びやかさに圧倒されます。緩やかなスロープが最上階までつながっていて、コンクリートの格子天井から光が降り注ぎます。吹き抜けの脇にはセキュリティのかかった教室があり、図書館や食堂も併設されています。最上階の製図室が作業スペースのようなところで、学生たちが集まって模型や作図などの作業をしていました。壁の色鮮やかな落書きがブラジルらしく、その空間がすばらしく、こんな空間で学んでみたくくなりました。到着までに24時間かかる地球の裏側ですが、ぜひ見に行ってください。

内村綾乃（短大非常勤講師）

10 アメリカ・テキサス州マーファ チナティ・ファンデーション

1986/ドナルド・ジャッドほか

テキサス州マーファのチナティには、ミニマリズムを代表するアメリカの作家、ドナルド・ジャッド（1928-1994）の作品が十全たる環境のもとに設営されています。基地の街マーファの軍撤退後、その跡地と廃墟をジャッドのために調達しはじめたDia財団でしたが、資金難で徐々にフェイドアウトしました。1971（昭和46）年以降、ジャッドはマーファに留り、作品を自力で完成させます。ジャッドは、作品はギャラリーを移動するものではなく、場所とともに創られ、恒久的に設営されるものであると早くから唱えていました。チナティはその実践の代表です。自らリノベーションした大砲格納庫と、そこに置かれた100個のアルミの箱、荒野に1kmにわたり並べられたコンクリートの箱の列が、チナティの主要作品です。磯崎新の「第三世代の美術館」の概念や「テートモダン」などのリノベーションの美術館にもつながり、現代美術館を考える上で必見の場所のひとつ。私は2016年10月26日にはじめて訪れました。

福山博之（非常勤講師）



Special Feature

Andar Cocek



©Andrea Pravettoni



SHUNKEN 2017

Jul.



vol.45 no.2

013

40回を迎えた関西研修旅行 訪れていない名建築を開拓

今年で記念すべき第40回を迎えた関西研修旅行。その試みとして、圓通寺や伏見稲荷大社、栄山寺、高野山、宝塚市役所、小篠邸、甲南漬資料館、竹中大工道具館など、これまで関西研修で訪れたことのなかった建築を開拓した。新たな刺激をもたらした今年の関西研修旅行について、幹事の竹田さん、参加者の坂本君にレポートしてもらった。

坂

【行程】2017年2月24日：圓通寺、大徳寺（孤篷庵・聚光院）、龍安寺、白河院／2月25日：伏見稲荷大社（旧荷田邸・御茶屋）、法隆寺、栄山寺／2月26日：高野山（金剛三昧院・金剛峰寺・壇上伽藍）／2月27日：宝塚市役所、カトリック宝塚教会、旧小篠邸／2月28日：甲子園会館、甲南漬資料館、竹中大工道具館

関 西研修旅行が個人旅行と異なるのは、通常非公開の建築を見学でき、さらに引率教員や現在活躍する建築家の専門的な解説・見解を聞けることだ。そこに魅力を感じ、5年間参加したが、今年はずいに幹事として企画に加わることになった。“今までの研修旅行とは一味違うもの”をモットーに、見学先のほとんどを関西研修旅行では初となる建築とした。それに伴い、宿泊先も一新した。今までの宿は1～2人部屋で、解散後各自で食事をとるのが普通であった。今回は大部屋で、かつ夕食付きの宿を選んだことにより、毎晩、学生・教員・建築家が自然と集い語り合う環境が生まれた。初の試みばかりで不安だったが、研修中の後輩達の笑顔や、学生と教員が建築を語り合う姿を見て、新しい風を吹き込むことができたと感じた。建築やまち並みを見て、おいしいお酒とご飯を味わい、感想や見解、疑問を語り合う。それは何にも変えられない貴重な体験になるだろう。1度と言わず、何度も参加してほしい。

text = 竹田実紅（M2 大川研）

5 日間の旅行では、物事の形式や骨格について思考したことで、自分の中で新しい見解が生まれたと感じられた。見学は、雄大な比叡山を借景とする圓通寺の息を呑む庭園風景からはじまる。特に印象的だったのが、西日に対する画期的な解法を提示した大徳寺孤篷庵の茶室「忘筌」だ。上半分の明障子と下半分の吹き放ちは躡口としても使用され、またそれが部屋の奥まで光を届けるための装置にもなっていた。伏見稲荷大社の御茶屋では、中門が流れや植物によって表現されていることで、露地に全体風景としての連続性を感じた。高野山では、赤松院に宿泊し、精進料理を食べた。はじめての宿坊は想像より快適だったのが良い思い出だ。近代建築では、村野藤吾が白鯨をイメージして設計したカトリック教会の地面から生えたようなつくりが印象的だった。行く先々で先生方の解説があり、その都度、同期の学生と見解を語り合うことで、これまで知識として学んだ建築史を、自分のプラクティスとして多少なりともデザインへつなげていけるようになったと感じている。

text = 坂本大真（4年 今村研）



2月24日：圓通寺庭園。かつてこの地一帯は後水尾上皇の離宮が営まれていた。仏殿（方丈）からは、借景の比叡山が眺められる。



2月26日：金剛峰寺にて集合写真。



2月27日：カトリック宝塚教会（1965/村野藤吾）。線路側から見ると、白鯨の尾びれにあたる塔屋が空へ向かって伸びている。



2月27日：旧小篠邸（現KHギャラリー芦屋）（1981/安藤忠雄）。コンクリート打ち放しの壁や天井にスリット状の開口が開けられ、そこから入る自然光が建物内部のさまざまな面を照らす。竣工後、増改築されている。

友達をつくる新入生オリエンテーション 八王子セミナーハウス体験

text = 酒匂教明 短大准教授

短 期大学部・建築・生活デザイン学科では、ここ数年、八王子セミナーハウスにて新入生オリエンテーションを実施しています。実施は登校初日の入学ガイダンスから2週間も経ていない時期とあって、友達づくりと建築に興味を持たせることが本プログラムの主な目的です。

八王子セミナーハウスは野猿峠という場所にあることからわかるように山の頂上付近にあり、周辺は緑が多く残る環境です。この時期の気候の良さ、満開の桜と相まって、新入生オリエンテーションには実に適した場所です。今年度は天気にも恵まれました。

プログラムの内容は、初日から「友達の名刺づくり」、「他己紹介」、「建築に関する講義」、「ペーパータワーコンテスト」と盛りだくさんです。大半がお互いに顔と名前を知らない中、お隣さんの名前を聞いて名刺をつくることから始まり、グループに分かれた後、今度は向かい側の人にヒヤリングして、みなさんに「他己紹介」をします。最初は溶け込めない大人しい雰囲気の人、きっかけがあると長舌になるのは昔も今も変わりません。建築を学ぶ初学者のための講義を熱心に聞いた後、夕食休憩に入りました。誰がはじめたのか、「ケイドロ=ドロケイ」が大半の人を食前運動へ導き、夕食後の眠さにも関わらず「ペーパータワーコンテスト」は大盛況となり、初日は終わりました。

2日目は「セミナーハウスの見学会」、「情報リテラシー」、「建物スケッチ」と続きます。セミナーハウス内の建物群は、建築家・吉阪隆正の作品とあって、新入生達の目にはかなり新鮮に映ったようです。熱心なグループが次のプログラムの時間を押しましたが、「情報リテラシー」が時間調整してくれて、無事に予定どおり昼食休憩に入れました。午後は各自の興味を持った建物群をスケッチして、自由解散となりました。

なお、このオリエンテーションのアンケートでは、「満足」と「やや満足」が合わせて89%に達し、「友達が増えた、距離が近くなった、仲良くなった、不安解消」など多くの好感記述が散見されました。談



講義を聞く様子。



ペーパータワーコンテスト。今年度は変わり種もあり、大盛況でした。



セミナーハウスの見学会を行った後、熱心にスケッチに取り組む学生たち。




集合写真。笑顔が多い、みなさんの顔が印象的でした。

#36 2017年4月27日 (木)

Guest

宮口明子さん 笠置秀紀さん (建築家)

建築を取り巻くさまざまな分野の最前線で活躍するゲストを招くトークイベント「オウケンカフェ」を毎月開催しています。今回のゲストは、建築家ユニット、ミリメーターの宮口明子さん、笠置秀紀さん。2名の学生によるレポートをお届けします。「オウケンカフェ」は学年を越えて誰でも参加可能です。授業では知ることのできない建築の楽しさに触れられる機会。ぜひ、気軽にご参加ください。 



今 回のトークでは、ミリメーターの初期から現在までの活動を追っていく中で、その時代の都市の要素が拾い上げられ、活動とともに映し出されているように感じた。時代とともに変化していく都市のイメージが活動から見えてくる。だからこそ、笠置さんの「2005年あたりから都市が見えなくなった」という言葉が印象に残る。最近では、普及したSNSやメディアによる広告媒体が都市のイメージを先行するようになり、都市に対する身体的な感覚が薄れてきているからなのだろう。

おふたりの活動は、「都市に直接つながる」という体験を促している。その中で、建築は都市と人をつなげる中間的な立場にある。そのとき、建築は人をどのように都市とつなげることができるのだろうか。身体性が薄れてきているからこそ重要なテーマだと感じる。

text= 仲村祥平 (M2 佐藤慎也研)

ど のプロジェクトも参加型のワークショップであるように思えた。宮口さん、笠置さんが、一方的に企画して終わりなのではなく、住民、学生、施設側の人々が参加することによって、その経験がまちを考えるきっかけとなるだろう。

仙台文学館のプロジェクトでは、現状のサイン計画に対して、クレーム対応のために貼り紙の量を増やすことよりも、情報一つひとつの貼り方が重要であることを、実際に参加させることで施設側に伝えている。その感覚があるからこそ、ミリメーターのふたりがいなくなった後も、レシピに基づいて情報の断捨離を継続することができるだろう。「URBANING_U」のようなミリメーターのプロジェクトに参加することは、自分の中の価値観を見出す、良い経験になるに違いないと感じた。

text= 市本和泉 (4年 古澤・二瓶研)



中央左から、ミリメーターの笠置秀紀さん、宮口明子さんと、司会の古澤大輔助教。

2017年度 新任非常勤講師の紹介

理工 担当科目：デザイン基礎、建築設計Ⅰ

雨宮知彦（あめみや・ともひこ）



2005年東京大学大学院修士課程修了。2005-09年CA t勤務。2009-17年ユニティデザイン共同主宰。2017年R/URBAN DESIGN OFFICE設立。2009-13年首都大学東京特任助教。2014-17年東京大学大学院特任研究員。

1年生を担当させていただくことになった雨宮知彦です。みなさんが大学に入り、はじめて「建築」と向き合う授業ということで、責任を感じていますが、まずは自分が建築と出会ったときの楽しさ・感動みたいなものをうまく伝えられればと思っています。一度ハマってしまえば、その先に広がる建築の世界はとても広く、多様で、人生をかけるに値するものだと思うはず。ぜひ、どんな課題でも一生懸命向き合っ、建築を好きになっていきましよう。僕も新しい発見に出会えることを楽しみにしています。



メガシティの小さな躯体2

理工 担当科目：建築設計Ⅲ、Ⅳ

木島千嘉（きじま・ちか）



1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1991年東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了。1991-99年日建設計設計部。2001年木島千嘉建築設計事務所設立。

独立前は研究所・福祉・教育施設などを、現在は住宅系を中心に設計をしています。建築設計の面白さは、正解がひとつでないこと、生み出す過程でも、活用する過程でも、さまざまな人やモノとの関わりの協働が必要で、自己完結できない一方、強い個の意思がなければ豊かさや魅力も発生しないこと、などなどあります。しかし、課題は実務でない分、より思考を純化したり、あるいは思いっきり暴走して試行錯誤できる貴重な機会です。建築に関わる、できるだけ多角的な筋トレに励んでください。



重ねの家 (photo=上田宏)

理工 担当科目：建築生産実験

唐沢智之（からさわ・ともゆき）



1992年職業訓練大学校建築科卒業。1992年鉄建建設入社。2011年宇都宮大学大学院工学研究科博士後期課程修了。現在鉄建建設研究開発センター材料グループリーダー。

2年生の「建築生産実験」を担当いたします唐沢です。ゼネコンの研究開発部門で、コンクリートの施工、耐久性を中心に、研究、現場支援などを行っています。鉄や木材と異なり、コンクリートは調合などを変化させることで、多種多様な性能を持たせることが可能です。さらにその性能は、製造、打込み、養生の違いにより変化します。だからこそ、良いコンクリートをつくるには、各過程を適切にコントロールすることが重要となります。実験を通して、そのことを伝えさせていただきたいと思います。



ミャンマーにおけるコンクリート工事支援

短大 担当科目：建築・生活デザインの基礎、建築デザインスタジオⅠ

北川卓（きたがわ・たく）



1995年日本大学理工学部建築学科卒業。1996-98年アールト大学在籍。1999年東京藝術大学大学院修了。東京藝術大学助手を経て、2006年フレームデザイン設立。現在、岡山県立大学非常勤講師。

自己の内面を表現するアートとは異なり、設計やデザインはより世の中や人との対話によってかたちが決まってきます。ですが、他者と議論し、ものごとを伝えることはとても大変です。そして、最終形に絶対的な正解はありません。ぜひ、これから課題の中で対話を進めていながら、好きなように自分を表して他者に伝えてください。課題でのみなさんとのやり取りの中で、僕もびっくりするような熱量をみなさんが見せてくれたら嬉しいです。楽しみにしています。



BLUE TAMAGAWA (Photo=Tatsuya Noaki)

2017年度 新任非常勤講師の紹介

短大 担当科目：建築デザインスタジオⅡ、Ⅲ

北島俊嗣（きたじま・としつぐ）



1991年日本大学理工学部建築学科卒業。1993年同大学大学院博士前期課程建築学専攻修了。1993-2005年谷口建築設計研究所。2005年北島建築設計事務所設立。

私が「建築」への気付きをいただいたのは、大学2年生の設計製図の授業でした。それから「建築」にのめり込み、「建築」設計を通して社会のお役に立てればと思っています。「建築」を考へつくことは、何もないところからつくり出す苦しさ、完成したときの嬉しさ、1日として同じことの繰返しがなく楽しさと、みんなでつくる充実感があります。「建築」の魅力を、少しでもみなさんにお伝えできればと思っています。



同和ラインビル

理工 担当科目：建築設備Ⅱ、Ⅲ

高橋計之（たかはし・かずゆき）



1997年日本大学理工学部建築学科卒業。環境エンジニアリングなどを経て、2005年Lapin建築設備工房設立。

20年間、設備という分野から建築の現場に関わってきました。建築設備は、年々、より重要なポジションとなっているのを実感します。今後、さらに必要とされる分野ですので、建築設備を学び、考える楽しさ・魅力に気付けるようになってほしいです。建築に関わる以上、数字に強くなるということは大切な要素です。数字から導き出される値の奥深さを知ってほしい。社会に必要な基礎知識と思考のプロセスを、現場の声を交えながら、解りやすく伝えたいです。私にしかできない刺激ある授業にしたいです。



岩見沢複合駅舎

理工 担当科目：デザイン基礎、建築設計Ⅰ

倉本剛（くらもと・ごう）



1997年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1998-2005年早川邦彦建築研究室。2006年倉本剛建築設計事務所設立。

建築学科を選んだ学生のみなさん、これを機に、とことん建築にのめり込んでみてください。貪欲になってください。頭でわかった気にならずに、自分の目や体や心で確かめてください。建築には正解はなく、ゴールもありません。今を積み重ねるのみです。それをずっと続けてください。きっと建築が途方もなく深く、広く、楽しいと気付くときがきます。学生時代は、自分の学びたいことに時間を思う存分使えます。こんな恵まれたチャンスは二度とありません。ぜひ、今を有意義に過ごしてください。応援しています。



高輪の集合住宅 (photo=上田宏)

理工 担当科目：建築設計Ⅰ、Ⅱ

都留理子（つる・りこ）



1994年九州大学工学部建築学科卒業。1994-96年青木淳建築計画事務所。1997-98年シーラカンスアンドアソシエイツ。1998年都留理子建築設計スタジオ設立。

実際の建築設計は試行錯誤の繰り返しです。納得のいく案になかなか辿り着けなかったり、難しい問題を解決しなければならなかったりと、そのプロセスは決して楽ではありません。しかし、求めていた案に至った瞬間はとても嬉しいですし、建築の完成時には他の何にも替えがたい大きな喜びがあります。設計製図の課題においても、試行錯誤とその先の作品完成というプロセスは全く同じです。少しでもそのプロセスが密度の濃いものになるよう、エスキスしていきたいと思えます。



下作延K (Photo=奥村浩司)

大学院 担当科目：建築デザイン I

西田 司（にしだ・おさむ）



横浜国立大学卒業、首都大学東京助手、横浜国立大学大学院助手を経て、オンデザイン代表。東京理科大学、京都造形芸術大学非常勤講師。

担当するのは、卒業設計を終え、これから社会の一員として建築をやっていくみなさんと、未来に向けて建築に何ができるのかを一緒に考える授業です。建築は人の暮らしを支える器であり、街に一人ひとりの居場所をつくる身体的なメディアでもあります。人口減少や高齢化やAI化などさまざまな社会の変化の中でも、建築は誰に対しても開かれています。建築の楽しさを、考えたり設計したりすることの価値を、日常生活の豊かさを、一人ひとりが自分のこととして向き合う楽しさを、一緒に模索できればと思います。



ヨコハマアパートメント
(photo=Koichi Torimura)

理工 担当科目：都市防災

藤賀 雅人（ふじが・まさと）



2008年明治大学工学部建築学科卒業、2013年同大学大学院博士後期課程修了。明治大学助手、目白大学専任講師を経て、2016年工学院大学建築学部まちづくり学科助教。

建築が連続した都市を対象に、快適に住み続けられるまちのあり方を研究しています。住み続けることのできるまちは、安全・安心な環境であることが強く求められます。現在の都市やまちは、社会の変化に応じつつ、こうした環境を求めたさまざまな判断・活動の積み重ねの結果として成り立っています。そこでは、いわゆる建築の視点だけでなく、文理の枠を超えた社会のメカニズムをとらえる視点が重要となります。こうした視点を共有しつつ、これからのまちのあり方をみなさんと考えたいと思います。



陸前高田市木造仮設住宅

理工 担当科目：建築設計 I、IV

飛田 幸作（ひだ・こうさく）



1987年日本大学理工学部建築学科卒業。1989年同大学大学院理工学研究科博士前期課程修了。1989年久米設計入社。2015年リレーションズ建築計画事務所設立。

未来をつくるみなさんをサポートします。さまざまな可能性を粘り強く考え、問題を一つひとつ丁寧に解いていくことが将来建築に関わっていく上での大きな糧になります。顧客要望の多様化、利害関係者の調整、更新される法規制など、建築をつくる過程には多くのハードルが存在します。でもそれを克服したときには、何とも言い難い充実感に満たされます。建築は楽しいです。ワクワクする建築の可能性を、みなさんと一緒に刺激し合いながら考えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



NERIMA Nursing home Project

理工 担当科目：不動産維持管理

正田 浩三（まさだ・こうぞう）



1978年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1979年国立公衆衛生院専攻課程環境科学科卒業。1979-2014年東京美装興業。現在東京美装興業顧問。

在来の建築工学は、「このようにつくっておけばこのようになるはずである」と、「手離れが良い」ことを求めてきました。「設計の理論の体系」です。しかし、建物がどのようにしたら我々が望むようなものになるのかという、「運転・居住の論理の体系」の考え方が必要になってきました。そこには、はじめて出てくる問題も極めて多く、新しい手法や技術の開発・体系化が必要になってきます。私の講義では、維持管理項目と建物の運転管理時に発生する問題点について、必要な技術・知識などを学びます。



『建築物の環境衛生管理』

『日本建築学会作品選集2017』に古澤大輔助教の建築作品「中央線高架下プロジェクト」が掲載

建築雑誌増刊「作品選集2017」（一般社団法人日本建築学会）に、古澤大輔助教、黒川泰孝氏（リライト_D）の建築作品「中央線高架下プロジェクト コミュニティステーション東小金井 モビリティステーション東小金井」が掲載された。本作品集は毎年の優れた建築作品を掲載するもので、今年は海外を含む全国から応募のあった397作品の中から100作品が選出された。

また、現在、建築学科・建築学専攻で非常勤講師を担当されている先生方も以下の建築作品で数多く掲載されている。「喜多方市新本庁舎」「希望ヶ丘プロジェクト 小規模集落型木造復興モデル群」（八木佐千子非常勤講師ほか）、「MORIUMIUS」（西田司非常勤講師ほか）、「時の流れる家」「ゆたか幼稚園」（菅原大輔非常勤講師）、「高床の段」（塚田修大非常勤講師）、「On the water」（山梨知彦非常勤講師ほか）、「新宿東宝ビル」（関谷和則非常勤講師ほか）。

なお、あわせて発表された、「2017年日本建築学会作品選奨」には「喜多方市新本庁舎」（八木佐千子非常勤講師ほか）、「On the water」（山梨知彦非常勤講師ほか）が選ばれており、「2017年日本建築学会教育賞（教育貢献）」では両宮知彦非常勤講師ほか「インドネシア・ジャカルタのインフォーマル集住地における漸進的環境改善実践を通じたインタラクティブ教育プログラム」で受賞している。

日本建築学会関東支部研究発表会における優秀研究報告集・若手優秀研究報告賞に建築学専攻・建築学科の学生が多数掲載及び受賞

2016年度（第87回）日本建築学会関東支部研究発表会における「優秀研究報告集」へ以下の4編の論文が掲載された。

- 建築学専攻2年（当時） 富澤彩菜さん（空間構造デザイン研）「建築用板ガラスの破壊応力と破壊性状に関する基礎的研究」
- 建築学専攻2年（当時） 菱木晶土君（空間構造デザイン研）「カーボンナノチューブ型分子構造を有する骨組架構の構造特性に関する基礎的研究」
- 建築学専攻2年（当時） 宮内隼君（空間構造デザイン研）「ETFEフィルムを用いたレンズ状密閉型二重空気膜構造の基本的力学性状に関する研究 積雪偏荷重時における挙動と進行性ポンディングに関する検討」
- 建築学科4年（当時） 鷹巢飛鳥君（材料施工研）「水セメント比の違いがベント管の圧力損失に及ぼす影響」

また、2016年度（第87回）日本建築学会関東支部研究発表会における「若手優秀研究報告賞」は以下6名が受賞した。

- 建築学専攻2年（当時） 大賀勇義君（空間構造デザイン研）「レンズ型二重空気膜構造を用いた圧力制御方式のガスホルダーへの適用性に関する研究」
- 建築学専攻2年（当時） 平野義光君（空間構造デザイン研）「四辺単純支持された建築用板ガラスの耐風圧強度に関する基礎的研究」
- 建築学専攻2年（当時） 笠原隆君（鋼構造・対雪設計研）「ストリングを用いた鋼構造建築物の応力・変形制御に関する基礎的研究 格子張弦梁構造の力学的特性について」
- 建築学科4年（当時） 吉野寛紀君（鋼構造・対雪設計研）「補剛材にストリング材を用いた圧縮材の座屈性状に関する基礎的研究」
- 建築学科4年（当時） 仲辻真理さん（山中研）「サービス付き高齢者

向け住宅における住民間の交流に関する研究 共用空間の配置計画と利用実態に着目して」

- 建築学科4年（当時） 杉浦菜々さん（山中研）「小学校3年生の意識から見るまちづくりに関する研究 下田市における「こどもまち遺産ワークショップ」を実施して」

井上勝夫特任教授が司法支援建築会議功労者に表彰

日本建築学会司法支援建築会議2017年全体会議の中で、井上勝夫特任教授が「司法支援建築会議功労者」として表彰された。この功労者は、司法支援建築会議に多大な貢献があった者を表彰するもの。井上特任教授は、現在も普及・交流部会長を務めるとともに、長年にわたって調停委員を務めていることが認められた。同時に池田耕一非常勤講師（元・教授）も功労者として表彰されている。

吉野泰子短期大学部教授と吉野研究室の研究成果を国際会議で発表

6月14～16日にフィリピン・マニラで開催された国際会議「第17回アジア学術会議フィリピン会合国際シンポジウム」において、オフグリッド住宅での実証実験の途中経過が報告された。これは、神奈川県三浦市に竣工した「TEAM OFF GRID PROJECT（完全自立循環型住宅の可能性を探る実証実験）」において得られた実態調査結果を取りまとめたもので、パッシブデザインと設計・テクノロジーの融合により電力の自給自足生活が760日を経過したという、未来の住まいのあり方を追求するプロジェクトの中間報告となった。

建築学専攻修了の堀川真之さんが山田一字賞を受賞

2016年3月に博士後期課程建築学専攻を修了し、学位を授与された堀川真之さん（現在、日本大学工学部助教）の博士論文「時間依存性を考慮した高強度鉄筋コンクリート柱の弾塑性挙動に関する解析的研究」が、「平成29年度（第14回）山田一字賞」（主催：公益財団法人前田記念工学振興財団）を受賞した。これは土木及び建築分野の学位論文に対して、学問的にも社会的にも有用であるだけでなく、特に獨創性・新規性に富む論文に対して授与される。

第2回住宅設計学生アイデアコンペにおいて建築学科4年の田口周弥君がウッドフレンズ社員賞を受賞

「第2回住宅設計学生アイデアコンペ」（主催：株式会社ウッドフレンズ）において、建築学科4年の田口周弥君（今村研）と梅津和樹さん（芝浦工業大学）の作品「Re:Wood」が「ウッドフレンズ社員賞」を受賞した。テーマは「国産材を有効に活用する新しい“名古屋”の住まい」。デザイン部門の応募総数は98件あり、最優秀賞1点、審査員特別賞2点に次ぐ賞として、入選作品からウッドフレンズの設計部門社員が選定した1点に選ばれた。



NEWS & TOPICS

第40回学生設計優秀作品展において建築学科卒業の成潜魏さんが難波和彦賞を受賞

「第40回学生設計優秀作品展（レモン展）」（主催：レモン画翠）において、建築学科を卒業した成潜魏さん（東京大学大学院・佐藤光彦研卒業）の卒業設計「城中村を、つなぐ」が「難波和彦賞」を受賞した。本展は、大学・専門学校建築科の卒業設計から優秀作品を一同に集めて展示と講評を行うもので、56校99学科から参加があり、5人の審査員がそれぞれ個人賞を選出し、難波和彦氏は審査員長を務めていた。



第40回学生設計優秀作品展「Portfolio Review2017」において建築学科4年の長谷川謙人さんと建築学専攻の菅野匡晴くん、添田魁くんが受賞

「第40回学生設計優秀作品展（レモン展）」（主催：レモン画翠）の特別企画「Portfolio Review2017」において、建築学科4年の長谷川謙人くん（佐藤光彦研）の作品「Dual Up」が「最優秀賞」を、建築学専攻1年の菅野匡晴くん（同）の作品「日記。」が審査員賞「加藤幸枝賞」を、建築学専攻2年の添田魁くん（古澤・二瓶研）の作品「KAITO SOEDA WORKS - Architectural portfolio Vol.1 2012-2016」が「特別賞」を受賞した。自分の作品を魅力的にプレゼンテーションするツールである「ポートフォリオ」の展示と講評を行うもので、応募作品23点から、最優秀賞1点、審査員賞4点、特別賞1点が選ばれた。

BOOK & MAGAZINE

『KS情報科学専門書 POV-Rayで学ぶはじめての3DCG制作 つくって身につく基本スキル』

羽入敏樹短大教授と星和磨短大准教授が共著として執筆した『KS情報科学専門書 POV-Rayで学ぶはじめての3DCG制作 つくって身につく基本スキル』（講談社）が刊行された。本書は、「建築情報処理」（短大2年後期科目）で用いる3次元コンピュータグラフィックス制作ソフトPOV-Rayの入門書となっている。オブジェクトの扱い方から、色や光、背景の操作など、作品づくりを通じて3DCGの基本をマスターできる一冊である。

『音響学入門ペディア』

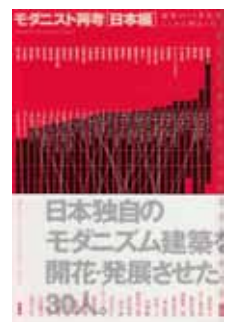
星和磨短大准教授が執筆協力した『音響学入門ペディア』（日本音響学会編、コロナ社）が刊行された。本書は、音響研究の分野では日常的に使われているが理解の難しい事柄に関して、研究室に配属されたばかりの後輩に先輩が教えるような形式で解説しており、48の質問で構成されている。星准教授は「Q22 音場の数値計算法について教えてください」を担当した。

『東日本大震災と〈復興〉の生活記録』

神田順特任教授が執筆協力を行った『東日本大震災と〈復興〉の生活記録』（吉原直樹・似田貝香門・松本行真編、六花出版）が刊行された。神田特任教授は「第1部さまざまな復興」の「釜石市唐丹の集落復興プロジェクト第一幕」を執筆している。

『モダニスト再考 [日本編] 建築の20世紀はここから始まった』

田所辰之助教授、矢代真己短大教授、川嶋勝短大非常勤講師、濱寄良実短大非常勤講師が執筆した『モダニスト再考 [日本編] 建築の20世紀はここから始まった』（彰国社編、彰国社）が刊行された。日本のモダニズム建築を代表する建築家30人を取り上げた論考集となっている。建築家と執筆担当は次の組み合わせで寄稿している。佐野利器・山口文象・小坂秀雄（田所）、村野藤吾・石原憲治・山越邦彦（矢代）、小山正和（川嶋）、山田守・今井兼次（濱寄）。



ARCHITECTURE & ME

[連載] 私と建築 vol.88

出会いの中で

text= 渡辺富雄 特任教授

私 が建築を選んだ理由は、何か強いきっかけがあったわけではなく、1967年に工業高校の建築科に入学したときで、50年前のことになる。高校ではクラブ活動として建築研修部を立ち上げて、限られた情報の中で、さまざまな図面を描いたり模型をつくったりしていた。建築雑誌「新建築」は部活動の貴重な情報源だった。一番の思い出は、3年の夏に「京都国際会館 建築設計競技応募作品集 1964」を参考にして、模型用の図面を描いて、最優秀案の大谷幸夫案と優秀案の菊竹清訓案の2つの模型を製作し、文化祭に展示したことである。卒業時にはなんとなく建築の設計や研究をしたいと考えていて、建設省（現：国土交通省）やゼネコンの設計部から合格通知をもらっていたが、先生の勧めもあり住宅公団（現：UR都市機構）に就職した。

最初の2年間は「高島平団地」の工事現場で、何も無い原っぱに、高層の30数棟の集合住宅が一齐に建ち上がっていく姿は壮観だった。その後、設計部に移り、団地の設計に関わった。低層高密度住宅や可変型住宅などさまざまな試みがなされていた時期で、多くの先輩達にもまれる中で、これはもっと勉強しないといけないと思い、日大建築学科に入学した。私の卒業研究は、このような実務での内容を活かして、集合住宅の住戸計画に取り組んだ。

大学院に進学し、若色峰郎先生のもとで2年間過ごした後に、設計事務所に就職した。3年後に縁あって大学に戻った。海洋建築工学科へ移籍された小林美夫先生のアトリエでは、特に「第二国立劇場建築設計競技 1986」において、坪山幸王先生（海洋建築工学科）や伊澤 岬先生（交通システム工学科）のお手伝いをしながら、それまでと全く違った大きな刺激を受けた。

今振り返ってみると、私の建築に対する視野を最も広げてくれたのは、30代の半ばから国際デザインワークショップにユニットマスターとして参加したことである。ニューヨークのプラット・インスティテュートが主催したもので、最初の1年は学生として参加し、次の年からは教える側に回った。ニューヨーク、ニュージャージー、モンリオール、ヴェローナ、大邱（韓国）と通算9年で10回参加した。参加者は多国籍で、北米、南米、アジア、ヨーロッパからの30～50名の参加者が4～5ユニットに分かれ、夏の40～50日間、集中的なワークショップだった。教える側も毎年入れ変わり、多国籍な2～3名で1ユニットを担当した。ニューヨークではバッテリーパーク、ルーズベルト・アイランド、コーニー・アイランド、エリス・アイランドなどの再整備計画をテーマにして、さまざまな国籍の人たちと日夜をともにした。その間、時間を見つけて、徹夜で建築雑誌を片手にさまざまな都市や建築を訪ねた。本当に若かつ



ニューヨークでのワークショップ（1993）、テーマは、ブルックリンのコーニー・アイランド（遊園地）の再生計画。ゲストを迎えての中間発表。（右端が筆者）



上：イエル大学 ホッケーリンク外観（1958/エロ・サーリネン）。右：ホッケーリンク内観。私にとってサーリネンは魅力的なアメリカ近代建築家のひとり。サーリネンの多様なプロジェクトの中から、私の研究テーマ（スポーツ施設）の関連から取り上げた。代々木第一体育館（1964）の6年前に竣工した美しい中央のアーチと吊り屋根のシルエットは印象的だった。左：「プロセスアーキテクチャー 78、1986」1984～86年にかけてマンハッタンのミッドタウンをサーベイしたものを紹介した。



たし、ワクワクする体験だった。

この頃、マンハッタンの公園や建築をサーベイしたものを雑誌「プロセスアーキテクチャ」に紹介した。スタジオでの語学のハンディに対して、スケッチを描きまくることによってコミュニケーションを取った。これによって英語とスケッチが相当鍛えられた（スケッチはユニバーサル・ランゲージ、語学ができなくても何とかなります）。

私と建築の関わりは、ひとつの目標に向かって一直線ではなく、そのときどきのさまざまな人たちとの出会いの中で支えられながら歩んできたように思う。今思うと、いろいろな場面、タイミングで気付かずに過ぎてしまったことがあるかも知れない。しかし、「こうしたいと思う気持ち」を持ち続ければ、チャンスは必ず巡ってくると思う。躊躇しないで第一歩を踏み出してください。

わたなべ とみお：1951年新潟県新発田市生まれ。1970-76年日本住宅公団（現UR都市機構）東京支社。1976年日本大学理工学部建築学科卒業（二部）。1978年同大学院理工学研究科修士課程修了。1978-80年依田建築設計事務所、森京介建築事務所ほか。1980年日本大学理工学部助手。2014年同教授。

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

建築を見に行こう

14 [REPORT]

関西研修旅行

短大新生オリエンテーション

オウケンカフェ #36

17 [NEWS & TOPICS]

・2017年度、非常勤講師紹介

・『日本建築学会作品選集2017』に古澤大輔助教の建築作品「中央線高架下プロジェクト」が掲載

・日本建築学会関東支部研究発表会における優秀研究報告集・若手優秀研究報告賞に
建築学専攻・建築学科の学生が多数掲載及び受賞

・井上勝夫特任教授が司法支援建築会議功労者に表彰

・吉野泰子短期大学部教授と吉野研究室の研究成果を国際会議で発表

・建築学専攻修了の堀川真之さんが山田一宇賞を受賞

ほか

22 [Architecture & Me]

vol.88 出会いの中で text= 渡辺富雄 特任教授

24 [Visit & Criticism]

学生建築探訪 vol.2 「太田市美術館・図書館」へ行く！

SHUNKEN

2017 Jul. Vol.45 No.2

「駿建」

発行日：2017年7月1日

発行人：中田善久

編集委員：佐藤慎也・宇崎崎勝也・宮里直也・山中新太郎・井口雅登・

古澤大輔・堀切梨奈子・宮田敦典・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.2

「太田市美術館・図書館」へ行く！

「太田市美術館・図書館」（設計：平田晃久/2017）

群馬県太田市東本町16番地30

開館時間：10時00分～20時00分

（日・祝は18時まで）

休館日：月曜日

text = 飯島貴太 (M1 古澤・二瓶研)



学生建築探訪第2回に取り上げるのは、2017年4月にオープンしたばかりの「太田市美術館・図書館」（写真1）。雑誌「新建築」の表紙も飾り、話題となっているこの建物を設計したのは、建築家の平田晃久さんです。平田さんは、大学院修了後、伊東豊雄建築設計事務所に勤め、その後、平田晃久建築設計事務所を設立されました。

平田さんは伊東事務所時代、「ゲント市文化フォーラム」の設計に携わっていたそうです。その原型となったのが「台中メトロポリタン・オペラハウス」でした。「台中」は、3次元曲面RCシェルによる巨大で洞窟のような空間を持つ、伊東さんの大作。そして、伊東さんは「ゲント」の空間を「生物的空間」ととえていました。この2つの建築に共通している、生き物のような、ヒダのようなRCシェルは、うねりながら内部にさまざまな場所をつくり出しています。どちらも有機的で生物のようなフォルムを持つ建築です。

そして、今回「新建築」2017年5月号に掲載された「太田市美術館・図書館」に寄せられた平田さんの論考タイトルは、「生態系としての公共のはじまり」でした。どうやら平田さんの建築観には、「ゲント」からはじまる「有機的」「生物」といったキーワードがあるようです。

「太田市美術館・図書館」は、ボックス内にプログラムが収められ、そこに巻き付いたリムと呼ばれるスロープ状の空間にプログラムが溢れ出す構成になっています。事前に写真を見たときは、そのような構成が明瞭に表れているイメージがありました。しかし、実際に訪れてみると、屋上や周辺の植栽が緑を帯びてきたことで、構成が持つ緊張感は薄れ、むしろ「ボックス」「リム」「植栽」

という要素がバラバラに見えました。さらに、駅前空間にある高架やバスロータリーの屋根などの要素が外観に表れたリムと呼応しているように見えて、とても面白かったです（写真2）。駅前という要素ですら建築の要素として取り込んでいて、外観からさまざまな要素を合わせ持った建築だということがかがえました。

中に入ると、そこに独特の穏やかな活気があることに驚きました（写真3）。そこには、従来の公共建築が持つ息苦しい雰囲気はなく、みながそれぞれの場所を見つけ、思い思いに過ごしているようでした。実際、平田さんも論考の中で「様々な年齢層やバックグラウンドの人々がそれぞれ自分の場所を見つけられるように、多様な特性を持った場所を立体的に共存させようとした」と述べています。

ボックスからリムへ溢れ出したプログラムは、家具によって規定され、リム空間を歩くとポイドや階段などが突如出現します。そして随所に、利用者それぞれが異なる身体性を許容できるような仕掛けがなされています。たとえば、階段のように登ることができる本棚（写真4）や、クッションが並べられた階段（写真5）など。通常は人が留まりにくい空間を、家具をうまく使うことで、利用者がそれぞれ

身体的に感知できる居場所に変えています。

さらに、絶対的な規格を持ったラーメン構造にリムが自由に巻き付くことでつくられるさまざまなスケールの空間も、多様な居場所の創出に寄与しています。家具によってつくられた居場所や、建築的につくられた居場所など、さまざまな居場所を持つ建築。それはすなわち、さまざまな利用者を受け入れる建築、ということになります。

さらに中心に設けられた吹き抜け空間に立つと、図書館や美術館という異なるプログラムが視界の中にレイヤー状に重なって表れます。異なるプログラムがひとつの建築の中に独立した状態で共存する、さまざまな機能を持つ建築です。

「太田市美術館・図書館」は、まさにカメラのような建築なのです。カメラとは「異質なものの合成」という意味。生物学的には、ひとつの体内に異なる遺伝子情報を持つ細胞が混じっている状態を指す言葉です。ボックスとリムと植栽、建築と敷地、図書館と美術館など、あらゆる異なる要素を溶かすことなく内包したカメラのような建築。平田さんが考え続けたこの生物的な建築は、新種の生物（建築）と言えるのではないのでしょうか。

